

東條耿一詩集

WEB刊行 第二版

二〇〇五年九月四日

編集 田中 裕

村井澄枝

寂寥

寂寥は――

日暮になるよ心にコトカタと

忍びよる

そして胸の古傷を

鋭いメスで切っていく

傷みに耐へかねた時

私は心のカナリヤに

想ひの文を結んではず

心のカナリヤは

遙かに杳い緑衣の

星を目ざして

暮靄の彼方に消えてゆく。

（「山桜」昭和九年一月号）

戀の短章

戀は

赤きヨウコウ爐です

とける鉛はネ、私でせうか

x

戀は夜空に瞬く星です

それを捉へやうとする

私はネ 阿呆でせうか

x

アダムの盗つた戀は

禁斷の木の實です

私は戀を拾つたので

盲目になつたのでせうか。

（「山桜」昭和九年一月号）

渚

渚に・・・

母を憶へば

限りなき波々の音

やさしき 母の子守歌と響き

貝殻を拾ひて 海に投ぐれば

追憶も ほろゝ

私は濡れ濡れて

ひとり 渚の砂よ

（「山桜」昭和九年二月号）

洪水

濁水は渦を巻きすさまじい勢いで流れる

河岸の家は皆押流されてしまったのに

子守唄が何處からか聞えてくる

母の子守唄でもない……………

父の子守唄でもない……………

旅で見た町々のやうに判然と記憶には

無いが何處からか聞えてくる子守唄……………

ああ父よ、母よー

たつた一人残された女はその力の無い

腕に一本の棒杭をしつかと抱き乍ら

もはや救ひを呼ぶだけの元氣もない

髪の毛は海草のやうに河中に浮び

刻々増る水嵩に女は眼を閉じた

だが……………その耳になほ子守唄が細々と

聞えてくる。

（「山桜」昭和九年六月号）

顔百態

お前はまだ人間の顔をしてゐない

衷心から嬉しい時のお前は

おかめの面を附けた

お目出度い顔をしてゐる

衷心からむらむらと

怒り立った時のお前は般若の面を

附けた物凄い夜叉の顔をしてゐる

世の中がつまらなくなつた時の

お前はひよつとこの面を附けた

下素根性の顔をしてゐる

百面相だ、百面相だ

そうだお前は眞實百面相だ

お前は生まれ乍らお面を付けて
生れてきたのだ

百面相に哭き百面相に踊る奴だ

お前が今、お面を取つたとて

お前の顔は人間の顔はしてゐない

お前が百面相の面を附けたまゝ、
鏡を見て、その鏡の中に
喜びもない怒憤もない悲嘆もない
無表情の顔を發見した時こそ
それが眞實の人間の顔で
お前のほんとうの顔なんだ。

(「山桜」昭和九年七月号)

春夜詩抄

ほとほと

ほとほと

聴こえる聲音は誰か知ら

戀しきひとの誘ひか

近く来るよな來ないよな

耳を澄ませ焦らすよに

春深夜を

春深夜を

ええ憎や誰か知ら

ひそやかに

ひそやかに

雨戸敲くは誰か知ら

戀しきひとのしろき手か

私を誑す狐狸か知ら

耳を澄ませば焦らすよに

春深夜を

春深夜を

ええ憎や誰か知ら

こつそりと

こつそりと

マッチを擦るは誰か知ら

消えた私の胸の灯を

仄かに点しまた消して

眼閉づれば焦らすよに

春深夜を

春深夜を

ええ憎や誰か知ら

(「山桜」 昭和九年七月号)

(「蠟人形」 昭和九年九月号)

馬

パパに抱かれて

乗った馬

ほかほか背中が

暖かい

ポツクリポツクリ歩きだしや

なんだかお尻が

くすぐつたい

ポクポク駆ければ

恐くなる

ゆつくり歩けば

いい天気

パパに抱かれて

乗った馬

下りれば大きく

見える馬

（「山桜」昭和九年七月号）

お面・神楽

お面が一つ欲しい

どんなお面でもいゝ、般若の面であらうと

天狗の面であらうとかまひません

それをすつぽり顔につけたら

私の顔の醜さも隠れるだろう

そしてせめてもの神楽舞にうき身をやつしたいのです。

私達は生きて居る間、神楽を踊らなければならないのです。

皆さんは・・・・・・・・まさか私の顔がこんなに

醜い容貌かをとは思はないでせう

きつと、色の白いやさしい好い男と

思ふかもしれませぬ。

それを見て私はひとり北叟笑乍ら、

皆さんを偽はりつゝ神楽を舞ひたいのです。

世の中にはどんなに多くの

お面をつけた人達が 居るかもしれませぬ。

噫、お面が一つ欲しい是非欲しい

おかめの面でもひよとこの面でもかまひません。

これで皆さんにもお面が私達には無くってはならないといふことが
はつきりとお解りになつたでせう

さあ皆さん お面の欲しいかたは私と一緒にお面を 求めませう
・・・・・・そして神楽を舞ひませう・・・・・・

（「山桜」昭和9年8月号）

風船玉

うんとふくらませ

うんとふくらませ 風船玉

頬ぺたはらしてうんとふこ

坊やお守に うんとふこ

そーら見る見るふくれ出す

うんとふくらませ

うんとふくらませ 風船玉

眼の玉くるくるうんとふこ

背中坊やも 眞似て吹く

そーら母さんに見せてやる

うんとふくらませ

うんとふくらませ 風船玉

頭を振り振りうんとふこ

あんまり吹いたらち切れる

そーらパチンとはち切れる。

(山桜文芸特輯號 昭和九年八月号)

母愁の秋

自ら身をせばめせばめて

こんなにも双肩に食入る重圧に一日の

安息とてない私の傷心に秋は大波の如

うねりうねり纏れた母愁を打寄する

母よ、唯一條の歪んだ感情に、まだこんな

にも私の心は見果てぬ蒼穹の真唯中に

的度もなく浮遊する風船玉だ

涙と共、只管に湧出する悔情は

描き損ねてはずたに画布を断切る

画家の焦心こころだ

ああだが母よ……

ひしひしと用赦なく双肩に喰入るこの重圧を

支へ、道標を尋ねてさ迷い疲れ切った

この足は腐敗した大根のようだ

歩き出せばぼろぼろに崩れるこの足……

血苦笑慟哭しつつ……

こころの螺せん階段を上り詰めるのは

ああ、いつの日か……

追憶の秋は今日も怒濤の如く歪んだ

廃船を洗ひ、貝殻は幼時の子守唄を

吐いては飲み、吐いては飲み

尖、尖、母の情感を運ぶ。

（「山桜」昭和九年九月号）

蕎麥の花

山深きひとつ家なれど

蕎麥の花しろじろ咲きて

ひそやかに秋は來にけり

こころなく歳は長けねど

ふくらみぬおもき乳房に

つのりゆく胸のときめき

眞白なる蕎麥の花にも

それとのう夢を偲ばせ

せつなしやうるむ眸よ。

（「山桜」昭和九年九月号）

キャンプ

白雲は低く流れて
手を出せば届きさうだよ
岩つばめすいすい飛んで
郭公の聲も静かよ

岩傳ひ清水尋ねて
白樺の森に這入れば
湧きかへる蝸の声して
山深くみどり匂ふよ

深々と狭霧生れて
遠山も霧にぼやける
木下透いて風も冷く
点る灯に山も眠るよ

校異： 「野の家族」では、最後から二行目は
「木下透いて風も冷し」となっている。

（昭和九年「山桜」九月号
「野の家族」昭和十年四月）

誰かしら

こつそりと

こつそりと

マツチを擦るは誰か知ら

消えた私の胸の灯を

仄かに灯しまた消して

眼閉づれば焦らすよに

春の夜を

怪しきマツチを擦るのは誰か知ら。

（「詩人時代」昭和九年九月号）

柚の實

送り來し柚の實なれや

ふくいくと冬を匂ひて

ふるさとの影をひそめり

懐かしの母が乳房よ

慕はしの君が面輪よ

想出は 柚に浮びて

歯を入れしたまゆらむねに
ほろほろと思慕のひろごり
淡き日は 袖に暮れ行く。

（「山桜」昭和九年十月号）

帰航（母への手紙）

夜毎、涙腺を揺らす母の白い御手に
綴られた涙の蒼白い花束が
病頭に郷愁を漂はせる

歸り得ぬふるさとを持つあなたの子は
故郷への慕心に、病み疲れた肺臓は
青ごけに埋もつてゐます。

それでも明日の彼方へ……………
帰航を送る挽歌に泣濡るゝ
心の廃港がある

母よ、今宵あなたへの別れの饗宴に

歯を入れた石榴から肌寒い郷愁は
私の体内に喰入り、ほろほると肺は
音も無く崩壊てくる

お母上よ、あなたが涙もて綴られた
蒼白い花束と共に、今こそ黒旗を掲げて
黝い私の廢船が故郷へ歸るのです。

（「山桜」昭和九年十月号）

戀の紅糸

戀の紅糸繰る宵は
薄い情にひかされて
どこまで伸びる戀ごころ
胸のしごきも空解ける

着物のたけをかよわせる
絹の糸さへ切れもする
ましてかぼそい戀の糸
切れたところを何としよう

戀の紅糸繰る宵は
ほのかな戀の溜息か
諦めませうの涙かよ
窓の茜の遠あかり。

（「山桜」昭和九年十月号）

秋の朝

とろりこ温くとい
寢床の中
ちんちん湯沸し　いい気持ち
竈戸にやちろちろ
薪燃えて
ぷーぷー御飯も　沸いてゐる
お背戸で父さの
くしゃみした
早よから落葉を　おかきだろ

障子も真赤な

朝焼けだ

厩でお馬も 鼻鳴らす。

（「山桜」昭和九年十月号）

一本橋渡る

渡る 渡るよ 下駄脱いでほい

ほいほいほい ころら ほいほいほい

體を浮かせて 浮かせてほい

一本橋揺れるよ ほいそれほい

とことんとこ そら滑る

渡る 渡るよ 舵とつてほい

ほいほいほい ころら ほいほいほい

ふうわり浮雲 浮雲ほい

流れに映つて ほいそれほい

とことんとこ そら危い

渡れ 渡るよ 一本橋ほい

ほいほいほい　　こら　ほいほいほい

他見をしないで　　しないでほい

遠くで鐘が鳴る　　ほいそれほい

とことんとこ　　そら落ちる

(掲載誌「山桜」昭和九年十一月号)

蜜柑に想ふ

ふるさとの青き蜜柑よ

わが胸にそつと抱けば

微笑みて母の問ひかく

ふるさとの青き蜜柑よ

わが耳にそつとあつれば

ひたひたと波のよせくる

ふるさとの青き蜜柑よ

わが唇にそつとあつれば

かのきみのべーぜ(接吻)うかびぬ

ふるさとの青き蜜柑よ

ふるさとの青き蜜柑よ
いつしかに泣きつ喰へぬ。

〔山桜〕 昭和九年十一月号

晩秋を知る

来るか、来るか、
遂 足止めた

…… 呆けつかれて
やるせな涙……

冷へた 素足に
晩秋を知る

〔山桜〕 昭和九年十一月号

濱邊にて

うす紅の小貝ひろひつ
なつかしさ胸にあふれて
沁々と光りにかざす。

父の貝、母の貝、
はたまた杳つ督先の
もだしては君の貝なと
供へますこれのせつなさ
限りなく涙あふるゝ。

いざ共に抱きつ行かばや
うす紅のあはれ小貝よ
ほとほとと ほとほとと
砂地に沁むる
あつき泪の跡を残しつ……
あてもなくさまよひて行く。

(山桜 昭和九年十二月号)

冬・斷章

風見は益々癩が強くなり
蠅は日毎、木乃伊の
首輪を飾る

x

黒猫は研ぎ澄まされた
メスを啜へて
眞闇の中に蹲つた。

私は、もはや動けない鼠であつた。

(「山桜」昭和九年十二月号)

滑り臺

日溜り小溜まり 滑り臺
光が跳ねて 踊つてさ

行きは登りで 段數へ

歸りは滑るよ スルスルスル

蒼空眺めて スルスルスル

お尻も温くないな スルスルスル。

お池にや 小波 白い波

白鳥も浮んで ゆうらりさ

緋鯉も見えるよ 臺の上

僕が先頭で スルスルスル

影も一緒に スルスルスル

後から後から スルスルスル。

日溜り小溜り 滑り臺

廣告氣球もつつとり 夢見てさ

遠くでサイレン 鳴つてゐる

どこかの小父さんも スルスルスル

お犬を抱いて スルスルスル

僕も負けない スルスルスル。

(「山桜」昭和九年十二月号)

(「詩人時代」昭和十年四月号)

病床・断片

地震

微かな力にも

時計は運行を中止し

薬瓶は冬眠から醒まされて

神経を尖らせてゐる。

病床

萬物の霊長と誇つてゐた俺も

口端の蠅すら追へなくなつたのか

あれ、蠅の奴！

俺の鼻毛を數へてゐる。

軽業師

するするつと

蜘蛛が天井裏から下りて來た

ほら見給へ！

蜘蛛の奴、おれの鼻の上で

一寸氣取つて切口上を述べてゐるぞ

世界一の曲藝が

これから始まるんだらう。

(昭和十年「山桜」一月号)

買はれ人形

婚禮の夜に或る娘の歌へる―

思はぬひとに嫁げとて

胸にきざめる初戀の

せつなき文字を何とせう

思ひは沓し君にとぶ。

十九の春の夢浅く

つれない風のたはむれに

散れば淋しや糸やなぎ

戀のつばめも拗ねて泣く

戀のむくろを着飾りて

こゝろすゝまぬみだれ夜を

買はれぬ人形の悲しさは

泣いて涙で 虹をぬる。

(昭和十年「詩人時代」一月号)

雪達磨（童謡）

――御慶の意味にて

ころころ轉がそ、ころんとしよ

やれそれころんと 雪達磨

ころ ころん と

高下駄の緒が切れた。

（笹の葉だけが、青かつた）

ころころ轉がそ、ころんとしよ

やれそれころんと 雪達磨

ころころころん と

躓づいた 木の根っこ

（南天の實だけが、赤かつた）

ころころ轉がそ、ころんとしよ

やれそれころんと 雪達磨

ころころころん と

二つに破れた 雪達磨

（お手々が急に、冷たいな）

（昭和十年「山桜」二月号）

林檎（小曲）

するすると、脱がれてゆく
絢びやかな衣装。

滴たるはじらひに微恐怖ふぶるこゝろつゝ
純白な肌はだかをさらす

あはれ、銀の小皿の
林檎よ……。

（昭和十年「山桜」二月号）

やくざ節峠の唄

見えるふるさと戸毎の灯り
ひとつ二つと數へた少年こゝろの
思出戀し峠に立てば
寒や月さへ濡れかゝる。

戀し母御よ、おふくる様よ
達者で御座りよかひと眼でよいが
逢ふに逢へないやくざが崇る

追はれ故郷よ、ふるさとよ。

やくざ意地なら人をも斬るが
義理と人情の絆は切れぬ
これが未練か、男の涙
結ぶ草鞋の紐に散る。

明日は何處ぞ、のう月様よ
空の鳥さえ塹はあるに
男一匹、安居の宿を
尋ね行く行く三度笠。

(昭和十年「山桜」二月号)

階段

(芝間甫先生に捧ぐ)

それはいくら昇つたとて
果しが無い
肺は壊れかゝつて
青い呼吸いきをする。
宿縁の段階に俺は一匹の
紅蜘蛛を捉へた。

間断無き秒速の狂ひ

降りて来る手術衣とメス。

〔野の家族〕所収 昭和十年四月

雨の音に想ふ

私は布団の中で凝つといきをひそめて

雨の音を聴いてゐる。

とう…るるるる

とう…るるるる

樋を流れる雨水の音は、胸を病む少女の

臨終の吐息を純白な青春譜になすりつける。

あるひは、私の胸の上にふんわりと被ひ蔽さ

つてくるあのひとのやわらかな聴診器。

ほのぼのと白い花の様に顫へて、探り寄つた

深夜のひそやかな香芬かきりのする囁きと、むせる

様な甘い接吻の後の涙…

つつるつつるしるるつつるしるる

つつるつつるしるるつつるしるる

ふるさとの母の顔にたゝまる皺が一本一本

蒼白い電波となつて私の臉のうらに

ひつかゝつてくる

黒いコマ、桃色のコマを綴つて、永劫に廻轉
して止まぬ歳月の齒車の上を、はるかに流れ
てゆくフィルムの青い軌音。

とうるとうるらりりりりりりりりりりり
とうるとうるらりりりりりりりりりりり

私は布団の中で、かるめのようにふくらむ
感傷を抱いて凝つと雨の音を聴いてゐる。

(「野の家族」昭和十年四月)

秋三唱

九月は…

茜の斜光を浴びて

帰る荷馬車の後を慕ふ

少年のおさない

感情です

十月は…

新妻にあられもない

疑をかけて

寂しがらせた姿です

十一月は…
留学の子を
彼の彼方に送った
母の…
波止場の感触です。

〔野の家族〕昭和一〇年四月

マドロス哀歌

波をまくらのマドロス稼業
ちやちな浮世に未練はないが
なまじ一夜の契りの夢に
泣いて待つだろぅ娘を思へや
やるせ涙が頬濡らす

ひろい海原口笛飛ばしや
星も泣き泣き流れて消える
鷗啼くなよ寂しゆてならぬ
男心のそぞろに鈍りや
知らぬ港の灯もうるむ

野暮な命と思ふちやをれど
すさむ心がかなしゆてならぬ
来る日来る日も潮に暮れて
こころ泌々古巢を慕へや
海に侘びしい春がくる

(「野の家族」昭和十年四月)

夕暮れ・小暮れ

夕暮れ 小暮れ

野の原包む

蜻蛉釣り止めて

お家へ帰る

ランプの下で

母さんも待たう。

野の沼 静寂(しづ)か

どろんと澄んで

ざわざわ芒

誰かが呼ぶよ

おお怖 怖い

後見ずに帰る。

夕暮れ 小暮れ

ひっそり野原

ひたひた下駄の

音さへ寂し

里の遠灯（ひ）一つ

ちろちろ招く。

（「野の家族」昭和十年四月）

便り

女房は安産

男だそうな。

母御は達者で

繭引くそうな。

月の光りを

塹壕に浴びて、

守護札まで添へた

便りを見れば

高粱枕も

苦にやならぬ。

〔詩人時代〕昭和十年四月号

病床哀戀賦

ほゝよせて あつきさゝやき
うつとりと ながるゝちしほ
まぼろしの こひとてうれし
みとりめの しろきふくにも
やははだの きみをおもひて
せつなしや うるむひとみよ
むねやめる せんなきみなれ
たそがれて けふもむなしく
しらかべに はくといきよ

（昭和十年「山桜」五月号）

大境の子守唄

終日

病金魚の如く寝台に浮かべば
郷愁は疼く病胸を貫き

ふかぶかと克明の死脈を越えて
おゝ、流れて来る子守唄がある。

白壁に冬蠅は不動と合掌し

晩鴉は枯木に奇奇と祈れど

嗚呼、蒼白の輪燈は

光明無明の大境に明滅し

凜、凜と空中に映へ

地下に響きて

父ならず、母ならず

将又、祖先にあらず

聴こえ来る、響き来る

……誰が哀音うたねそ。

がば!! とどす黒き喀血は

終曲に一枚の地圖を加へて

燃上がり、かき消ゆる輪燈よ。

のた打ちつ、仄めぐり

潮の引く如く消えて行く

あゝ……消えて行く

……子守唄よ

(昭和十年「山桜」五月号)

想い出

心の空に流星は

今宵も逝きたり

蕭條の

砂原杳く續く靴跡は

僕の微笑む人生のコース…

傍に添へる小刻みな木履の跡は

彼女の明朗な戀愛のコース…

されど

二條の線の消え行くところ

あゝ…永久に悲し

破鏡の流星は逝く

過し方には、

涙する雪洞の灯

揺らめきて…。

(昭和十年「山桜」五月号)

野道(小曲)

別れて歸る野道には

ほろほろ野鳩が啼いてゐた。

別れて歸る野道には
月もしろじろ照るばかり。

別れて歸る野道には
忘れな草の花の色。

(昭和十年「山桜」六月号)

愛人の歌

わが限りなき思慕のひとに

愛人よ。愛人よ。

朝、眼が醒めたら

そつと口の中でそう云つて御覧。

あの人の甘い體臭が匂つて来ます。カルシユ

ームの体内を廻るやうに、お花畑の花蜜の

やうに、みんな昇降機エレベーターのやうに膨らんで来

るあのひとへのアツピールです。

愛人よ。愛人よ。

晝の休憩のひと時を、螺せん階段に立つて、
そつと口の中でそう云つて御覧。

オフィスに疲れたあなたは、夏海邊を散歩
するでせう。あのひとの微笑みはヨットの

様に海を滑り、鷗のやうに波に散るでせう。

愛人よ。愛人よ。

あなたが懐郷病ほしむしづくに寂しくなつた時

そつと口の中でそう云つて御覧。

ふるさとのゆるやかに廻る水車の銀玉を浴び

た片隅に、雲雀の飛立つ段々畑の丘に、馬車

に轆かれて死んだ久さんの墓の土饅頭の周

圍にはねるど端の日當りのいゝ路畑に、眠

そうな牛の反すうする牧場に、あのひとの

微笑みは柔かな若草になつて青々と萌える

でせう。そしてじやすみんのやうに、あな

たの心に甦つて来るでせう。

(昭和十年「山桜」六月号)

春の悲歌 (小曲)

未刊詩集「銀河に泣く」より

われの優しきひとあらば

胸の痛みを心の傷を

笑める愛撫に訴えつゝ

甘へてもみん春宵を。

われの優しきひとあらば

花の訪なう窓の邊に

君が歌音の花詩集

涙ながしつ聞かうもの。

われの優しきひとあらば

胸にきざめる初戀の

思い出永久に育みつゝ

語り歌はんよもすがら。

されども、われは胸病めぬ

嘆きのなかに 幻を

求めまさぐるかたいなれ

「……あはれ、優しきひとあらば」

(昭和十年「山桜」六月号)

郷愁譜

季節のサクソフオンは、

マドリガルを奏で

緑の曲馬團旗^{カス}を靡かせて

大陸を南へ、南へ……
渡るといふもの。

ひび割れた、いかつい横顔を
ひきむしられた私は
今日も大陸に向かつて
高々と手を振るのであるが……

季節の觸手に持ち去られた灰の脱穴は
ぎくぎくと痛み、哀愁の白鳩は
もう私に反すうしては呉れない。

千嗟、今日も ひねもす
蹠跟と想ひ出の貝殻を綴れば
おお、聞こえるよ

季節の奏でるサキソフォンの
郷愁譜……。

(昭和十年「山桜」六月号)

日光ばやし(小唄)

ハア―

山は男體 ハツソレソレ
三国一よ サツサヤレコノ

婿にとりたい婿にとりたい

器量者

ソーレヤレコノホイトコリヤセ
ヤンレヤレソレホホイノホイ。

ハアー

霧の衣を ハツソレソレ
さらりと脱げば

サツサヤレコノ

仰ぐ華厳も仰ぐ華厳も

虹のかげ

ソーレヤレコノホイトコリヤセ
ヤンレヤレソレホホイノホイ。

ハアー

左甚五の ハツソレソレ
眠りの猫に

サツサヤレコノ

龍も啼きます龍も啼きます

ソーレヤレコノホイトコリヤセ
ヤンレヤレソレホホイノホイ。

(昭和十年「詩人時代」六月号)

春雨戀慕抄

ひそひそと
ひそひそと

胸にやさしく囁くは

いととききみのみ言葉か

接吻ベーゼに せしほろよひか

いやいや あれは……

春雨 こそめ 窓の雨

ほろほろと

ほろほろと

忍びやかなる骸韻ササリネ音は

胸にやさしく顔埋めて

悲戀を哭きし君なるか

いやいや あれは……

春雨 こそめ 窓の雨

忘れよとて

忘れよとて

消せど消えざる面影を

思い出だせと春の夜を

君の泪か わが泣聲なみこゑ

いやいや あれは……………

春雨 こそめ 窓の雨

悲戀はつこひを

悲戀を

秘めて嫁いだきみ故に

捨て得ぬ性の悲しさは

今宵も窓に泣き濡るゝ

ほほ ほんに あれは……………

春雨 こそめ 戀の雨

(昭和十年「山桜」七月号)

忍従の謝肉祭カアニバル

騒雨あめにがつくり首垂れた軍鶏の姿を

俺は、俺の姿の中に見たくないのだ

腹を見せて浮かんだ病金魚きんぎょの呼吸を

俺は、俺の息吹の中に識りたくないのだ。

よしや腐れ爛れた四肢であつても

ぎりぎり蝕まれる病肺に拍車を駆けよと

俺は、俺の惨めな容態すがたを投げ棄うつて

おお、傲然と反りかへるのだ。

譬へ、解剖台にメスは閃き待たうと

いかつい悪魔の横顔をぐわんと擲はりつけて

俺は、傲然と嘯き、

冷たき歲月の距離デスタンスを睥睨するのだ

そして、最後の血潮の一滴まで

灼熱と燃え狂ひ、

俺は、俺の肉体もて捧ぐるのだ

呼こゝろ呼……忍従の謝肉祭を………

(昭和十年「山桜」七月号)

合圖(民謡)

ぴろゝ口笛

合圖だ ホイ

雨戸 細目に

開いたぞ ホイ

お絹さーかよ

聲かけりや

憎や しもつた

親父だ ホイ

(昭和十年「山桜」七月号)

乳房

或るコミュニニストの妻に代りて

夫は獄舎に疲労の蹠を虐めて

蒼白に錆び付く苦々しきおきての陰影に哭き

いじらしき愛兒は無慈悲な表情と剥落する

母親の乳房に氷柱の飛沫を泣き訴むる

憧憬は朽ち、はらからの白き眼裏に追はれ

音もなく崩壊れゆく信念の思想……

吁嗟今ぞ、つかれた網膜に見る時代に敗惨し

土像の、あはれ、身を裂く泥滅への生活よ

乳房よ、落魄の凋落きつづれよ

夢を破壊し、團欒の葩片をむしり、病患の
肺臓を侵して、日毎黝ずみ、夜毎萎れ果て
悶絶の、いきどほりの、焦燥よ。

されど

バイバイ

乳々よ、乳々よと乳房まさぐる

愛兒^{なれ}あればこそ、尚生きて死ぬ

愛兒愛すればこそ、よれよれの乳房なりとて

悲しみの母體なりとて、榮冠を孕み

赫赫と大鵬を呼び……

(昭和十年「山桜」八月号)

白鳩に寄す (小曲)

白鳩の……

……ああ白鳩の

仄かな胸のふくらみは

きみの乳房にやうも似た

甘き香芬よ ときめきよ

ほろほろ浮ぶ面影よ。

白鳩の……

……ああ白鳩の

あかくうるめるつぶら瞳は
きみの瞳にやうも似た
静かな微笑よはじらひよ
ほろほろ泛ぶ接吻よ

散りし純情^{はなびら}……

………破壊れ夢

果敢なきものよ追憶よ

ああ白鳩の白鳩の

純白きやは肌抱きつゝ

淡き灯影の窓に凭る

(昭和十年「山桜」八月号)

Chocolate のゆぶぐれ

異人墓地の見える海邊を

Canvas と pastel を抱えた新嘉坡の少女は

チエホフのやうな貌をして

スカート裾から貝殻を落としては

歩んだ。

貝殻は砂の中で、みんなひとつ
寂しさに顫えながら、それでも
ひらひら翻る少女のスカートに

サインすることを忘れない。

やがて貝殻たちは

侘しい潮鳴りをギターのやうに聞き乍ら

新嘉坡の港から来た金口を喫付け

ごとごとと殻の中に赤いベレエを

かむつて眠る。

かうして、みんな みんな

静かに生れる

Chocolate 色のゆふぐれ……

(昭和十年「山桜」九月号)

ねがひ (小曲)

あはれ われ

微風とならまし

匂やかなきみのはだへに

そと甘えつゝ、はじらひつゝ

わが想ひ かたらん

あはれ われ

蝸とならまし

きみ住みたまふ窓の邊に
やさしきそが友となりてよ
ひねもすを奏で歌はん

あはれ われ
貝殻とならまし

やさしきひと
來りて拾ふ時
微笑みてその掌上に眠らん

あはれ われ
せつなる ねがひ……

(昭和十年「山桜」九月号)

金婚式

いかつい掟の息吹は

病患いたつきの頬を搥り、切々と骨を碎きて

今宵もわが冷床ふしどに冷笑の笞鞭ち

たぶ、たぶ、と嘯く。

あゝ 煙突よ、浚渫船よ
フアナ クリスマン

がらがらと黒き煤を飛翔し、重油を飛沫せ
とば マシン にほは
夢の如、白き眠の如、遙か幻滅の彼方

滔々と流れ去り、消え去り行く渦巻、
なか

誰が祝祭ぞ、わが冷床を襲き
よろこび ふしど

獄窓の静寂揺すつて
しじま

るる……るるりん……

流れ来る、響き来る、金婚式の顫音……
トレモロ

闇を斷ち、宙に轉び

さめざめと獄窓を仰げば、月光は亡妻を映像し、
まど つきかけ つま うち
白々とわが瘦驅を哭く

その中に巍然と存在し、傲然と嘯く

人生のフルートよ

運命のサクソフォンよ。

乾枯びぬ乳房なりとて、

よれよれの臥床なりとて
ふしど

われを待ち、われを迎ふる團欒あらば
まじあ

貧しくも、泌々と、心濡るゝを……

吁々 亡妻よ、

夢の如、現實の如、歌音聞きつゝ

今宵も白びた無精鬚をまさぐり

われは戀ふ、おん身の體臭を、

あゝ……金婚式を……。

(昭和十年「詩人時代」九月号)

酸漿の詩

ほほづき、ほほづき

そは圓らなるかの赤きメノウ

はた麗はしきかの珊瑚。

われ、その美しさに魂うばはれ

その麗はしさにそと接吻けみて

ああ かくも手痛き

そが苦味を知れり。

されど

われいまだ若く人の世の

まことの憂さを知らず

沁々とその苦味を忘れ得ず。

ほほづき、ほほづき
そは赤く、苦き
はた忘れ得ぬ、思い出の苦味
ああ、さればわれ
ほほづきの
その苦味を愛ず。

(昭和十年「山桜」十月号)

ひめごと(小曲)

燃え燃ゆる……
情熱の滾りそ秘めて
寄り添へば、寄り添ふて
闇にからむ
掌とて汗ばむ。

はじめての……
接吻に、接吻に
羞恥ひつ、崩るゝうなじ
仄かにも闇をくまどり
わが唇に淡く残れる
紅の香の甘きもうれし

感傷の、胸とてうづき

しのびかに、しのびかに

行きつ、戻りつ……

只、それだけに

ああかくもわが魂は躍るか

夜半の密會……

近作集より

(昭和十年「山桜」十月号)

子供

父は逞しい背を向けて背負^{をんぶ}してやらうといふ

母はやはらかい膝の上に抱っこしてやらうといふ、

だのに子供は、どちらにも嫌、嫌をして

獨り危つかしい足どりでよちよちと歩み出すのだ。

白鳥の浮んである公園の池の淵の回轉木馬に乗ってから、

七色の風車のくるくる廻つてゐる紙芝居の屋台店を覗いて、

鳩ポツポが仲良く豆を喰べてゐる観音様で少し遊んで、

映画館^{かっだう}の音楽^{デシク}も聞かせてやるよ。

それから坊やの好きなチョコレートを一ぱい買つて……

と父はいふ。

含むととろりと甘い母乳おっぱひをたくさん呑み乍ら

昨日の續きの面白い御伽噺をお聞き。

それに飽きたら母ちゃん優しい子守唄で静かにお寝みね。

屹度いつもの綺麗な夢の國から美しい小人達がどつさり

お玩具を持つて遊びに来るから…と母はいふ。

だのに子供はどちらにも嫌、嫌をして

庭のまだ熟れない青い蜜柑が食べたいといふ

お池の金魚を掴んで来て石で潰すのだといふ

父は困つてどうしたものだらうと母にいふ

母も困つてどうしたものだらうと父にいふ

二人のもてあましてゐる子供は不思議さうに

父と母の顔を見る。その黒曜石の様な瞳には

おもうい灰色の空がどんよりと映つてゐる。

(昭和十年「山桜」十一月号)

彼女とゆふぐれ

乳房は海に續いてゐるのだらうか

貴女の肉體からだの中を小人のやうに歩き廻る私に

辛い潮の香が痛く咽喉のどに沁み、

波に打上げられた海草が乾枯びて生臭い。

私の立つてゐる丘の向ふにも大きな丘があつて疎らな雑木林を透いて砂丘は沓く何處までも伸びてゐるのか、血のやうな夕焼けがその向ふにある。

私は不圖懐かしい母乳ちちの匂を聽いて

丘から丘を行つたり來たりする。

誰も通らないと思つてゐたのに、その道に

は煙草の吸殻が棄ててあつて寂寥さびしい。

ゆふぐれがかあてんをひろげて行くので

海水の溜まつてゐさうな窪地に

貝殻は喪章のやうに侘しいといふのか

少しも弾んでくれないゴム毬のやうな

戀情を抱いて

私はゆふぐれの丘を下る

祈り(小曲)

實にきみよ はかなからずや
春の野に懸れる虹の
窓の邊に寄する櫻の
若き日のあまたの戀の。

ひとゝきの 美酒醉寐の
みじか夜のそのひめごとの
ものみな世のたのしさは
木梢なる、銀の白露。

さこそあれ、はかなき者は
ただにこそ天にならへて
とむらはむ、曇る思ひを
祈るかな、憂さし運命を。

(昭和十年「山桜」十一月号)

槍

私の恐迫観念症より

ごろりと横になると定つて

私の腹を狙ふ鋭どい槍がある

何處の誰奴とやっがどう狙ふのかは知らないが
研澄とやっまされた穂尖がピカリ

ピカリ 空間に閃き

見えない、そ奴の、殺気立つた眼が
凝乎と私の腹を凝視しているのだ

私はもう怖ろしさに全身がおのゝいて

無我夢中に跳起きやうとするのだが

一寸でも動いたら、その瞬間!!

槍は私の腹を貫ぬくだらう。

全身の何處が痛んでも

腹にぐつと力を入れて耐えるものなのに

その腹を突尖されて

一體、何處で痛みに耐へよう

槍は秒速の隙も興へず、チリ、チリと
私の腹を狙つて

近寄り

遠退き

尚もギラギラと空間に閃いてゐる

私は何に縋ろう、誰の力を求めよう

然し、幾ら悶搔いたとて、齒痒んだとて

この場合どうなるものか

私は悲しく諦めて静かに眼を閉じる

悲しくも諦観し、眼を閉じれば

おお、ありありと

名も知らぬ美しい花が咲いて繞る

仄かなるその香が馥郁と私を包んでめぐる…

おお、繞る……

(昭和十年「山桜」十二月号)

花言葉(小曲)

ひそかにあなたを戀してた

あたしは赤い鬱金香

甘い囁き 戀の雨

濡れて育つた風信子

想ひは永劫かはらない

赤紫のライラック

四ツ葉、クローバー、櫻草
可憐な戀のジャスミンよ
見せて上げたいこの純情

どうして想ひが通うやら
あなたの胸の戀占ひ
若しやさうでなかつたら？
迷つて焦がれてとつおいつ
あはれなマーガレットのあたしなの
こんなメランに煩惱のシネリア
いつも憂鬱メランのゼラニウム
片輪想ひの矢車草
淋しい戀の花なのよ

胸に開いて胸に散る
スエートパイやら君影草
いつか悲しい想ひ出の
忽忘草になりました。

海亀

海亀の海の匂よ
こつこつと甲を叩けば
ひえびえとつたふ空虚しさ
こぞの夏、君とあそびし

(昭和十年「山桜」十二月号)

房総の海を憶ひて
諦念とひとり佇ずみ
色あせし夢を偲べば
ほろほろと身にしむ憂ひ

海亀の海の匂い
こつこつと甲を叩きて
しみじみと涙ながしぬ

(昭和十年「蠟人形」十二月号)

ゆふぐれの中の私

ゆふぐれになると定つて私の視野の中へ這入つて怯て伊達巻
を解く女がある

片隅の黒色のかあてんの蔭に

私の純白い寝臺があるからだろうか

その女はいつもひようひようと鳴らない口笛を鳴らしてゐる

その女は素早く私を脇の下に包んでしまふ

それは親鳩の愛撫のやうに優しく

それは母さんの乳房のやうに甘く

その女は鋭どい銀の針で突然私の唇にお黙りをしてしまふ

それは妖精の王子様の悪戯のやうに

それは父さんのお折檻のやうに

その女の姿を見ると私は何もかも解らなくなつてしまふ

それはお伽國の魔法の杖に觸れたやうに

それはその女を見たやうでもあるし見ないやうでもある

ように

私はその女が鳥のやうに無氣味で怖い

私はその女が雛鳥のやうに懐しく可愛い

私はその女に伊達巻を解くことを教えはしない

だのに、ゆふぐれになると定つて

私の視野の中を

物憂く

掠め

突つ走り

ひよろひよろと鳴らない口笛を鳴らし乍ら

伊達巻を解く女がある

(昭和十年「蠟人形」十二月号)

たそがれの魔術師

たそがれの花花はひっそりと呼吸をひそめ

あの女は私の眼前に純白い肉體を展げて

碧玉い眼を瞑る

そして真黒い服を纏った空虚な匂のする侏儒が黴臭い片隅から手術台を曳出すと、私は口に呪文を唱へ乍ら
恐怖でも、手馴れた様を見せてメスを握る

こん度は真紅な服を纏った獣類の臭氣のする侏儒が
純白な絹布を裸體の女の上に覆ると私の全身は繊細
に顫ひを呼び、唇まで蒼白になるがそれは彼等に解
らない

花花は態を静め、呼吸を抹殺す

私は突如、女の肉體にメスを加れる

瞬く間に首を切り、乳房を割り股を断つが

その女の歔歔は矢つ張り私の情をぐいぐい引き・るので

私のメスを持つ手は石のやうに重くなるので、ああ、

私は何度こんな魔術を中止やめしようと想つたか知れない

でも獣類の臭氣の失なつた青い侏儒が急いで純白な

絹布を剥取ると、あの女は純白い肉體を包み乍ら碧

玉い眼を開いて微笑むので……

たそがれ花はまた賑やかな呼吸をはじめ

(昭和十一年「山桜」一月号)

病猿の詩

閨房の女猿は寄り添へど
病める猿は悲しげに
夕べの星をさしのぞく

肌はだにさむき生活なりはひに

眼はうすれ、毛はさびれ
ありやなしやの息凍ゆ

想ひ常世に馳せばとて
既にきはまる生命ゆゑ
こころ建つれどいたましや
あるがまゝなるきぬぎぬに
深山やまの温泉いづゆの香を包み
病める猿は杖取りつ

遣瀬なしとや想いけん
淋しく、苦し、掌たなひの
銀の小鈴ぞうち鳴らす。

一九三六、一、十五

(昭和十一年「山桜」二月号)

葬列のあるくれがた

くれがた廢墟のやうなこの村にも

蜜柑色の灯が点ると

風のやうに流れ出す葬列がある

銀の刺繡ぬいとりの送り人て、銀の牽牛、真中に取囲れた銀の棺、何もかも銀色の長い葬列に磴音も

なく、声も無く、おもかげ 還時の正月を迎へた松飾りの村を霧のやうにひつそりと覗いて行く

遊びつか呆れて母の膝ねむに寝る子供等の夢に

新たな年に幸多かれと祈る年寄達のおもひ想念に

働き疲れた若者等にせめてもの夜の絆を結ぶ

娘等おとめらの肉体の底に

なほこれら哀しい葬列は影のごとく練り歩く
のであろうか

私は道端にとろとろ枯柴を焚いて葬列を見送

つた。しかしそれはいつまで見送っても断れ
ることがなかった

憂愁かなしみに疼く私の胸に遠くふるさとから寄せる
潮風がおもたい

ああ私はいつの頃からこの哀美うつくしい葬列を見
るようになったのであらう…

くれがた焙あぶりだし絵のやうに浮ぶ銀色の葬列は

ひっそりと跫音もなく、声も無し

私の心の村にいつまでも続く…

〔蠟人形〕昭和十一年二月号（二月読者作品号推薦詩集）

羽子をつく

おとなびしわれにてあれど

苦しみの堪えがたければ

妹の羽子板取りて

たわむれに羽子をばつきぬ

松飾り緑のかけに

玉砂利白き奥庭おくどに

あるまじき狂ひごとかや
羽子の音こつんこつんと
ひそやかに静寂しじまを縫ひて

たはむれにつきてみれど

こぞの初春はる追羽子つきし

かの君のかの日の姿

眼に映り消えもやらねば

苦しきのひとしほつる

おとなびしわれにてあれど

苦しきの堪えがたければ

たはむれの羽子をつきつゝ

いつしかに涙ながしぬ

〔「蠟人形」昭和十一年二月号〕

葬列

白日の強靱な光線ひかりを浴びて

遂に炎天の草叢にのびてしまった男の

爛れた眼には最早一抹の光りも通はない
ジクジクとうす汚れた繻帯に滲み出す濃汁に
芬芳と飛び交ふ蒼蠅の群

宿命の定法の中に斃れたこの腐肉を

私は抱いて哀しく草叢に寝つた

仄かに頬に冷たい青草の匂、屍より漂
ひ出る芳醇な悪臭の色を縫つて悠久な
青空を静かに飛ぶ白雲

ゆらゆらとよるめき、がつつと重い
足どりで眞黒い一群の葬列が微風のご
とく傍を掠める私達を見て、送り人の
中からペツと唾を投げたのは、紛れも
なくアリストテレスに違ひない
その慄つとする白眼を見ても直ぐわかる
僅かに優しく目禮を置いていつたのは
確かプラトン。ニイチエはせゝら嘲ひ
カントは横よこを向いて……

凡ゆる侮蔑と、唾棄と、憐愍が炎のやうに
渦巻き、押流れ

まだ見たことのないこの葬列は私の視

野の中を西から東へ音も無く消えて行つた

後には白日を翳る濃汁の臭氣と

芬芳と飛び交ふ蒼蠅の群と

炎天の草叢にのびてしまつた腐れ屍に

はまだ何處からかひつそりと通ふ息吹

きがあるのであらう

莊嚴な音楽がすすしくその咽喉より流

れ出てゐた

ああ此處にも彼等の識らない眞理が生

まれてゐた

(昭和十一年「山桜」三月号)

そんな夜

そんな夜

あなたの瞳は月夜の澄んだ湖になるので

私は銀の魚になつてピチピチ泳ぎ廻る

そしてあなたの黒髪は匂高い青麦の丘になるので、私は終日^{ひねまひす}
るりりり麦笛を吹き乍ら雲雀の巢を尋ねる

そしてあなたの肩は紫嬰粟けしの群咲いてゐる堤になるので、私

は瑠璃ステッキの洋杖をふり振り陽気になつて何べんも行つたり來たりする

そしてあなたの紅唇くちびるは瑞瑞しく熟れた苺畑になるので、私は

針を持たない蜜蜂になつてちゆうちゆう吸ひまはる

そしてあなたの乳房は誰も知らない宝物たからの山になるので、私

は妖精フェアリーの侏儒こびとになつて銀の鶴嘴を入れる

そしてあなたの肉体は焼立ての柔かい麵麩になるので、私は
飢えた子供になつて戴いてしまふ

そして、そんな夜

あなたはまだ若いくせに隠してゐた地味な装身珠くびかざりを周章しゅうしょうてて
落してしまふのです。

〔「蠟人形」昭和十一年三月号〕

散歩

踏んでしまふには惜しい嫩草。病院の垣に添ふて行くと微風まで青
い。一寸伊達巻にでも巻いて見たくなる青空。雲雀の唄が幾つでも零こぼ

れて来る。小川（小川）は無いけれど、何處かでひっそり透蠶（透蠶）の生れる音がする。

GOSTOPのやうに氣取つて大きく手をひろげてゐる蜘蛛の巣。ちよいと啄（啄）ばんでしまつた愛らしい存在よ、殺さうと生かさうと私の思ひのまま。けれど私は寛大主義者（寛大主義者）、愉快に散歩しなければならぬ。ふうつと吹飛ばすとするくる舞つて行く小さな生命。私のやうに

道端の破損（破損）れた淡暗い小屋を覗くと、泥土（泥土）に塗れてこつこつ骨髄を造つてゐる人。こちら向いたら、どすとふすきいのやうな瞳。傍に積まれてある骨髄にゆくりなくも泛んでくる幾つかの面影。ぶううんと匂ふ静寂を私はこよなく愛する。

道は白く息づいて何處までも續いてゐる。空ばかり見ると、ひっそり翔ける銀の馬車があるやうで私はふと目許（目許）に妖精（妖精）の長い睫毛を感じる。チラツと傍らを掠めて行くセルの明るい緑色。春は何處かにミレーのやうなペインターを隠してゐるに違ひない。

（昭和十一年「山桜」六月号）

桐の花

桐の花の下に佇つと
鼓動は昂かつた

桐の花びらを噛むと
ほろほろと苦い、ぼくは胸が熱くなつた。

つひ知らず切裂いた花びらに
つうーん つうーんと
ぼくは水つばい寂しさをなめた。

せめて咲^ひいてる間を
今日もまた見る花なのに
何故にかうも懐しいのか
苛だたしいのか 悲しいのか
桐の花よ。

桐の花は紫ぼかし
何故にお前は花をつけた・・・。

(昭和十一年「山桜」九月号)

傷

秋近き風のまろびかに
湯上がりのすがしき憩ひ。
愛しみつ、繙帯を除けば
花石榴顫ふかに群れひらき
ふとも流れ来るにほひ。

訝しみ、うち見れば
黒蟻のあまた集ひて
花びらのへりより覗き、
あるは仄紅きおくがを揺りて
ふかふかと蜜吸^とる蜂の
こそばゆげ、見えつ
隠れつ……。

(昭和十一年「山桜」十月号)

ゆふぐれ

ゆふぐれになると、雀のようにはしやぎだす子供達！
けれどまだあたりは、大地に酔ひ痴れてゐる酔漢の臭い息

のやうに熱い。

棕櫚の葉に戯れてゐる小さな風

子供達はぶらんこに乗つて夕焼けの空高く
上つて行く。

夕月のやうに白い脛を見せて

子供達よ、

ふるさとの空に挨拶をおし。

ぶらんこは明るい音をたて

子供達の笑ひ聲が

紅い花びらのやうに落ちて来る。

傍をそつと神さまの白い散歩

ああ ゆふぐれよ。

繻帯の白さを巻いて

私はまだこんな美しい風景の中に
立つてゐた。

(昭和十一年「山桜」十月号)

青鳩

朝方眼帯を除つてみた

鬱たうしいこころも繻帯と共に取替へて

さつぱりとした気持ちで病棟いへを出る

芒の径 団栗の林 百舌の聲がきんきん沁みる

あいつの悪戯しわざだらう

枯枝に蛙がいくつも刺してある

さうかさうだおれも確かに死ぬことはあるんだ

うつろな胸をつとつきぬけてつたのはその聲だつたか

眼見ゆればこそその空の色 垣根越しても娑婆の風だ

どりやおれも青鳩でも飛ばさうかな

ふるさとの山脈が遙かに青い

(昭和十二年「四季」一月号)

雨後

痛々しいほど 叩きのめされてる

なかには 中腰をへし折られたのもある

そのまゝ みんな仰向いて 花をつけてる

しかも 美しさに遜色がないんだ

おお ボン・チユウル・コスモスの花たち蔭

人はうっかり仰向くと泥のなかに足をつつ込む。

(昭和十二年「山桜」一月号)

少年

北の窓だけが開いている。そこから夕陽がちよろちよろ零れ。半ばは壊れた積木のお城が、部屋一ぱいにひろげた世界地図を占領して見える。その傍のちよつぴり覗いてゐる青い畳へ、べつたり頬を押しつけて大の字なりにへたばつてゐるのは、確かに王子さまらしい。とどころどころきらきら光るサーベルを引き抜き、ナポレオンが何だ！太閤が何だ！お父さんだつてお母さんだつて、なんだつてかんだつて、ぼくの邪魔をしようなら、みんな平らげてしまふ、と意気まいてゐる。

(昭和十二年「山桜」二月号)

靄

火葬場の姿は見えない

靄の中から

念佛の聲 類白の歌

静かだな 爽やかだな いや和やかだな

ひとり閑雅な舌鼓をうち

まがつた指も器用に 私は

朝餉の箸をうごかしてゐる

(昭和十二年「山桜」三月号)

(昭和十二年「四季」二月号掲載)

望郷臺

故郷よ 故郷よ 私の向いた方向に お前は居るのか

いや居るに違ひない 幼い頃に別れたなりで

私はお前を覚えてゐない ああ 病んでゐる身の逢ひには行けず

呼べば甞は返つて来るが 羨しいぞよ 紅蜻蛉

(昭和十二年文学界二月号掲載)

(昭和十四年「山桜」四月号に舊作として)

椰子の実

「眉毛もない 鼻もない
みれば見るほど

死んだお父さんそつくりよ……」

こよひもまた寮をぬけ

ひとり赤松の幹に凭れて

あなたは抱き 涙を流し さうして

飽くことなく愛撫する 椰子の実を

おお椰子の実よ お前もまた

故郷を知らぬ子

少女の腕に軽くあれ

(昭和十二年「山桜」三月号)

誕生

風が吹く 紙戸を閉める 雪が降る 懐炉を点す

不自由な 盲ひの身の 明け暮れを 手塩にかけて

鶯の 一つの歌の誕生を 心密かに待つてゐる

沈黙の佳人 不屈の禅師 ああこの寮友ともに跪拜する

(昭和十二年「山桜」五月号)

舞踏聖歌

灯が消える 灯が点る 雲に風さへ加はつて
時折不気味な 音を立て
玻璃扉へ咲くのは 雪の華
死報の鐘が 病棟の 周囲をめぐつて 木霊する

今人々は踊つてる 言葉もなく 聲もなく
無言の裡に踊つてる
形而上の踊りです さう形而上の踊りです

どうやら吹雪になりました

たいそう寒気が滲みまますな

地球が冷えて行くのでせう

さあどうぞおあたりなさい

お湯の滾りも心よい

何かのどかな晩ですね

天国地国が一つになつた

何故かそんな気がします

二列に並んだ 寝床^{ベット}では 病んだ金魚のそれほどに
微かな呼吸が生れてる
吊つた布団や 松葉杖 物云ひたげな 表情です

仄明りうすら漂ふ その真ん中の 寝床では
口紅ほどの 血を吐いて
死んだ少女が 眠つてる

その枕元で 友の手が 可愛い鬘を 結^あんでゐる

結んでゐる 鬘を眺めて 人々は 心密かに感じてる
同じいやうに或るものを
それは等しく 無言の裡に 感じ合つてるものでした

今人々は踊つてる 言葉もなく 聲もなく
無言の裡に踊つてる
形而上の踊りです さう形而上の踊りです

世界の普遍の

いのち
生命の中の

和解の出来ぬ 二つのちから
その合一ぢやないですか・・・

灯が消える 灯が点る 吹雪吹ぶいて 夜が更ける
死報の鐘がはるばると
村々めぐつて 鳴つてゐる 歌つてゐる 鳴つてゐる

(昭和十二年「山桜」五月号)

霧の夜の風景に詠める歌

向ひの山脈に霧が湧き それがこちらへ移つて来る
月は今中空 雲は一ひら風もない
足下に辛夷の一本 その白い花かげを透いて
寮舎は遠く山峡に眠つてゐる
激しい議論の後 友は去り 私は暫くをこの美しい風景に見入る
君は口の酸っぱくなるほど人間を説いた 偉いと思ふ しかし
君はあの病床の夥しい肉塊を知つて得よう さうして自己を
生き乍ら腐つて行く亡んで行く肉体に
何の精神 何の立派な統一性があらう
否定し給へ 否定する事だ 否定し去つた後にこそ

新しく生れる血の滾りを覚え
肉の孕むのを知るだらう ああしかし・・・
霧がこちらの山を登つて来る 寮の灯はもう見えない
夜は三更 この風景の斜面に佇つて
私は心にはげしく立ちすくむ

(昭和十二年「山桜」六月号)

鞭の下の歌

ちちよ ちちよ
いかなればかくも激しく 狂ほしく
はた切なく われのみを打ちたまふや
飛び来る鞭のきびしきに耐え兼ね

暗き水面の只中を泳ぎ悶轉^{まろ}べど

石塊^{いしくれ}の重き袖は沈み 裳裾は蛇の如く足に絡みて
はや濁水はわれを呑まんとす

おお わがちちよ
なにとて おん身 われを殺さむとするぞ
死にたくはなし！ 死にたくはなし！

卑しく 空しく いはれなき汚辱の下に死にたくはなし！

好みてかくも醜く 病みさらばへるにあらざるを

おん身の打ち振ふ 鞭は鳴り

鞭はとどろき

ああ 遂に！

鼻はちぎれ 額は裂けて血を噴けり

おおされどわれ死なじ 断じて死なじ！

たとへ鞭の手あらくなりまさり 濁水力を殺げど

おん身の心やはらぎ 憐情に飢ゆる時まで

おおその時まで 血を吐き 悶絶すとも

おん身の足下に われ泳がん 泳ぎて行かん。

(昭和十二年「山桜」六月号)

84

伴侶

義足よ つれづれの孤独の伴侶とも私に力を借せよかし
人生の片影ひとのよ そを安らかに歩むより 私に想望おもふ事もなし
いまこそ疵も癒ゆたれば お前に学び 歩きたい
向ひの病室 あちらの花芥いかりほし 凧の泳ぐ芝平ら

(昭和十二年「山桜」六月号)

心象スケッチ

春日抄

日はうらうつらと燃えちぢれ 花菜畑を私は歩む
人生既に半ば いまこの途上に佇つて
古い感情も叫ばず 想ふ事すべて平明
囀鳥しきり 佇ずみ 花粉にまみれ
うつらうつらと私は歩む

いのちの友

彼の書齋に灯がはいる 書架一鉢黄水仙
彼は人生を嘲ふ 彼は文学を罵倒する

片方きりの眉毛がちよと動く
さうして彼は聲を上げて読む フロオベエルの書簡
ああそのやうな日もありき 北條よ
わが盲ひて 物想ふ宵

春の虹

お尻を振り首を振り 躓き乍ら沼に飛入る家鴨達
その向うの堤の上を電車が走る
新療地区に雲を割つて日ざしが立つ
望郷臺にほつかり架つた春の虹

青畳

向ひの丘に雲雀啼き 陽炎燃えて燈籠一基
さてわが寮は 床間とこに一幅 花鳥の図
仄やかに爽やかに 匂ふ備後の青畳
軒におとなふ熊ん蜂
いま友は読書の後 気軽な昼寝
偽足を脱いで枕にする

唾蟬

夏の日の沈黙の佳人 樹間隠れの唾蟬よ
お前は神さまの不浄物 美しい不具者 私の精神こころ
さうして私の貧しい歌は この哀れな唾の蟬
心で啼いて歌はれず

(昭和十二年「山桜」七月号)

別れて後に

日が暮れる　　雑林はやしも沈む　　ああ日が暮れる
私達の眩きも　　もう済んだ　　孤りになつた私のうしろで
ツグミが啼く　　ああその歌も悲しい　　その生命も呪はしい
影をます　　その暮藍の中へ

私もまたあの雑居寮へ　　遷かへらねばならんのだ

その共同しぐきの生活と謂へ

私にはもう堪らない　　取残されたこの椅子ベンチも
思へば共有の物なのだ　　ああ堪らない　　私は行かう
日が暮れる　　私は行かう　　残り少ない　　私の影　　影よ
その影のやうに　　私は闇の中へ　　沈んで行かう
何處までも（ああそれは不幸だらうか）しかし
私は構はない　　私は私を信じよう

（昭和十二年「山桜」八月号）

夕雲物語

リノリウムには先刻から朝日が溜つたり跳ねたりしてゐるのに、
いくら揺り起してもお父さんの返事がない。よつばと眠いのだらう。

と暫く枕頭で待つてゐると、附添夫は黙つて眠つてゐるお父さんを擔荷に乗せ、解剖室へ連れて行つてしまつた。一體なにことが起きたんだらう、と蟻子は小さい胸を痛めたがいつの間になら忘れて遊び呆けてしまつた。夕方になつて不圖思ひ出し、解剖室へ行つて重い扉の隙間からそつと覗いて見ると、確かに台の上に寝てゐた筈のお父さんの姿が見えず、そのかはり片隅に白木の大きな箱がちよこなんと坐つてゐる。それならきつと何處かへ用事に行つたんだらう。とその日は歸つて寝てしまつた。

翌る朝。お父さんのお骨上げですよ。と保母さんに連れられお友達と一緒に來て見たが、火葬場にもやつぱりお父さんの姿は見えない。さては厠の中へでも墜ちてゐるのか知ら。と妙からず心配した。見ると保母さんもお友達もみんなしくしく泣き乍ら灰皿のきれいに焼けた骨がらを拾つてゐるので、ではお父さんは本當に死んでしまつたのかも知れない。と始めて悲しくなつたが、心の中ではきつと何處かに隠れてゐるに違ひない、さうして不意にわたしを、吃驚させるお積りなんだわ。と考へられ、手にする骨がらも貝殻のやうに美しく見えてくるのだつた。

歸つてから病室の厠の中も捜して見たが墜ちてはゐない。これはいけないぞといよいよ心配になり、それから思ひ出す度に病院ぢうを尋ね廻るのだつたが、お父さんは何處にも見えず、彼女はしみじみひとりぼつちになつたことを感じ、淋しくなるばかりであつた。

ある日。望郷台へのぼつて西の空いつぱいに流れてゐる夕雲を見てゐると、雲の形がさまざまに變つてゆくので、すっかり面白くな

つて見惚れてゐた。子どもを抱いたヒグマになつたり、お伽噺に聞いた海の中のお城に見えたかと思ふともう青い堤の向うに耳だけ出して隠れたつもりであるらしい兔になつたりした。はては人の様になり、優しい眼まで出来てそれは次第に誰かの顔に似て来た。蟻子は思はず、お父さんだ。と叫んで、まがつた指も伸びてしまふほど空いつぱいに両手を上げた。雲の中に隠れてしまつたんだもの、いくら尋しても分らない筈だつた。と思ひ、それにしてもどうしてあんな所へ行つてしまつたのだらうと不思議になつた。すると、急にお父さんとの間に遠いとほい距離を感じ、お父さんのバカ、お父さんのバカ。と小さく咳いた。あまつさへはるか彼方の山脈の上の一つ星がきらきら耀きそめると、望郷台にはせうせうと冷たい風が流れ出し、やうやく見つけたお父さんの姿も見てゐるうちにひつそりと灰色の闇の中に沈んでしまつたので、蟻子はとうとう聲をあけて泣き出した。

(昭和十二年「山桜」十月号)

晩秋

芒のさ揺れ 赤松の幹の光 静かな疎林のほとりからこころに沁
みいる アンジェラスの鐘

小父チャン 天ニモ才家ガアルンデシヨ

アレハ迷子ニナラナイヤウニ 天ノ才家デ鳴ラスノネ

天ノ才家ハホントノ才家ネ アソコニハ オ父サンヤ

オ母サンモ ミンナヱルンデシヨ アタイハヤク行キタイナ

ミンナハ天ノ才家 知ラナイノ？

ミンナハ遊ブコトバカリ知ツテヱテ ホントノ才家へ帰ルノヲ

忘レテシマツタ オバカサン イケナイネ……

チヤア 小父チャンハ？

アア小父チャンモ忘レテヱタヨ コレカラハハルチャント

仲良ク帰ラウネ

ミンナトンボニナツテ帰ルノネ ステキ ステキ

止んでまた鳴りつぐ 鐘の音の 枯野は寂し

ああ肩の上の少女の聲に

しみじみと自省す はんぎやくの虚心……

(昭和十二年「山桜」十月号)

樹々ら悩みぬ

北條民雄に贈るー

月に攀ぢよ
月に攀ぢよ

樹樹ら 悲しげに 身を顫はせて眩きぬ

蒼夜なり
微塵の曇りなし
圓やかに 虔しく 鋭く 冴え
唯ひとり 高く在せり

月に攀ぢよ
月に攀ぢよ

樹樹ら 手を取り 額をあつめ
あらはになりて 身を顫ふ
されど地面にどつしりと根は張り
地面はどつしりと足を捉へ

(悲しきか)
(悲し)
(苦しきか)
(苦し)

樹樹らの悩み 地に満ちぬ
彼等はてもなく 呼び應ふ

ああ月に攀ぢよ
月に攀ぢよ

樹樹ら 翔け昇らんとて
翔け昇らんとて 激しく身悶ゆれど
地面にどつしりと根は張り
地面はどつしりと足を捉へ

(昭和十二年 四季 十一月号)

国旗

白地を浸し
日の丸を抜き
露ら 群をなして
光りぬ
光りぬ
萬象をひとつに孕み
瞬間を燦と光りぬ
静づ静づと竿を濡らし
こころよく肌へをめぐり
露ら 虔しく 鮮やかに消えぬ
ひとつ、
またふたつ、
（悲しきか）
（あらじ）
（嬉しきか）
（あらじ）
日に遭ひて更に光りぬ
風勁ければ
彼等一瞬にして麗はしく死絶へぬ
（はた風の吹かざるもまた・・・）
こは何ならむ
露ら知らじ
とこしへに露ら知らじ
ただ日の丸の紅きを知るのみ。

（昭和十二年「山桜」十二月号）

元旦スケッチ集

静かなる微笑みに明け

静かなる微笑みに明け
わがこころ悦しみに憂ゆ
何事の願ひぞありや
この慶き日

我やすらかに御霊を納さん^{かへ}

門松に光在り

門松に光りあり
いちはやくおおつもごりの日めぐりをはぐ
曲り木は曲れるままに
病める身は病めるままに ほどのよさ
御供に歳を點して
ああこれでよし これですよし。

七千の針の群れ

神経痛を病める者ありー

七千の針の群れ
恰も肉の中を駆けめぐる如
御飾りの何にめでたからん
着布團をばりばり噛みて
終日 哀號哀號と叫ぶあり。

静臥

とつくにの少女ありをじめ

青き瞳めの静かに光る

につぼんの羽子板抱きて

とつくにの初日を臥める。

(新春詩集 詩話会編)

(昭和十三年「山桜」一月号)

木枯の日の記憶

ひと日サーカスを観てー

木枯の 寒い寒い日であつた
微酔の 悲しい機嫌の日であつた

少女が綱を渡つてた
露はな肌も寒むさうに
いのちの綱を渡つてた

綺麗な素足が宙を踏む
一寸道化てまた渡る
細い細い綱だつた

宙に咲いたり 返つたり
余り見事に恍惚と

只観衆ひとづみは面白さう

一杯機嫌で眺めてた

浮かれ心に誘はれて

この私もうかうかと

悲しい気持ちで眺めてた

少女が綱を渡つてた

恰も宙を踏むやうに

いのちの綱を渡つてた

木枯の 寒い日であつた

微酔の 悲しい機嫌の日であつた

一九三七・十一・二九・作

(昭和十三年「山桜」一月号)

念願

何を思ふといふでもなく

ぼんやり坐つてゐる机の前

草編みのすだれの蔭へ

不意に訪なふ蝉一つ

挨拶もなく 見みえもなく

忽ち 高々と歌ひ出す 描き出す

天来の妙音 ゆかしい心象

可愛い奴 神々しい奴

蝉 蝉よ

嗚呼お前のやうに歌ひたい
巧まずに 無雑作に
私の日頃の百の感情……

(昭和十三年「山桜」九月号)

夕雲物語

改稿・その二

落葉を踏んでふたりは歩きました。やはらかに肩を組合つて愉しいのでありました。さうして天の刑罰でこんな病に罹なつたのだとは少しも思はないのでありました。二つの魂が歩む度に、落葉が小さな旋風をあげて足下を駈けまわつてゐました。空は痛いほど青く澄んで、すっかり坊主になつた林の向うから犬が啼きました。それが空の中で啼いたやうに思はれるのでありました。

わう、わう、わう、ばう……

男は口をすぼめて啼真似ながら、林の向うへ挑むのでありました。それは空の青に輝がはいるやうに思はれました。すると、林の向うからは前よりも激しく食つて掛るのでありました。それはどうやら空から落ちてくるやうでした。

わう、わう、わう、ばう……

男は面白くなつて、負けずに林の向うへ啼き返すのでありました。

それはやつぱり空の青に輝がはいるやうでした。　あなたお止しなさいよ　女は微笑みながら、林の向うへ首をかしげ、男の肩をそつと抓りました。男の啼声が早くなると、林の向うでも早くなりました。林の向ふから思ひ出したやうに飛んでくると、男の方でも急いでそれに相槌を打ちました。さうして女の間のびた足が、道端の堆肥を丁寧にさらつた時、始めて男の啼声が途中でひつ切れました。その煽りで、落葉がながいことふたりの周囲をくるくるくる廻つてゐました。女は美しい盲でありました。詰らなくなつてやめたのか、林の向うは静かになつて、いつの間にか、輝のはいつた空から、美しい夕雲が覗いてゐるのでありました。

(昭和十三年「山桜」十月号)

孟蘭盆

み佛を迎へるとは何といふ美しいこの世の習慣しほいひなでありませう　遠き祖先みおやや兄弟はろがらや親しい友のたれかれと仏間に度しく見えるのは何といふ麗うつくはしい団まじ樂あであります　あの夜の和樂　この世の愚痴を彼等は賑やかに取り交はすであります　賽の河原のわらべらも今宵茄子のお馬で愉しく一夜を遊ぶであります　岐阜ほん提灯のやはらかな青い燈は　それをこの世ならぬものに　仄かに照すでありま

せう 香煙は縷々として夜つびても饗宴うたげの膳へめくを困繞へめくるであります
う まことに今宵ほど あの世がこの世であり この世があので
ないと誰が言へるであります 入滅といひ 昇天といひ 何とい
ふ厳かな人の世の嬉しい有情であります やがて 佛間に夜は更
けるであります されどみ佛とわれ等の歡語たはぶちは尽きることなくめ
んめんと続くであります み佛たちに別れるのは何にもまして悲
しいであります 暫しの別れではありませんがそれがどのやうに
深い悲愁かなしみであるかは 佛間に集ふ者のみが知るところであります
おつつけこちらから訪ねることに致ませう やがて彼等は涙を呑ん
で袂を別つてあります 嗚呼この有情の激しさ 抒情の精華 永
遠の人間性は何時も斯くの如くであります み佛を迎へるとは何
と言ふ美しいこの世の習慣であります

(昭和十三年「山桜」十月号)

朝霧

納骨堂の境内から聖歌が流れる ソプラノのいい聲だ
みすくひの水に罪きよめられ あらたに生れしわれ
は神の子・・・

その歌の方へ ひとりの盲が杖を曳く 彼は草を分
ける楓の幹をちよいと叩く

さうして覚束なげに歩みを運ぶ 朝霧は臙に霽れ
て 彼を包む夜明けの色

(昭和十四年「山桜」一月号)

友を祝し給はずば

朝は病房を輝かし 寒氣凜然、

東天の下、今し、茶毘に附す友の煙ひとすじゆるやかに銀孤を描く

・・・・父よ、友を憐れみ給へ

父よ、友を赦し給へ

父よ、われ等の祈祷を聴き容れ給へ

見るよ、あの人はよつぼど気立がやさしいとみえて、

煙まで静かだぜ・・・」

うんにやあ、さうちやあんめえよ。あんまり長く

わずらつたで、ぼんぼん昇る元気がねえすら。」

さうきやなあ、でもまあ、こげえいい日に焼かれりやあ、

気持ちよく成佛出来るだんべ。」

違えねえ、おいらも早く引取つて貰えてえもんだ、

娑婆の朝はこげえに寒いで……

農舎の庭の小溜りに

就業の前のひと時を

焚火を囲んで農夫らの明るい談笑……

友等よ、のどかなその明け暮れよ、屈託のない生存よ、

霜は足下から解けかゝり

鳥は婆々と晴天を歌ふ

茶毘の煙は虔しく朝日の縞にたなびき

火葬場からは一ぱいに溢れて来る

和やかな聖歌、祈祷の聲

……父よ、友を憐れみ給へ

父よ、友を赦し給へ

父よ、われ等の祈祷を聴き容れ給へ。

(昭和十四年「山桜」二月号)

明日への言葉

てんばになつても

いやいや盲ひになつても

こころしみじみ生きてゐたいと思ふ

この身、疫病みくづれる
宿痾者、天刑者よ
父や母にも呆られて

かくて、幾歳、寝台ヘッパの上の繃帯達磨
それでもなんでも生きてゐたいと思ふ

このひたぶるの心 この激しい慾求
あはれ、赤裸なる人の世の心よ

死に行く運命さだめを厭ふにはあらねど

はたまた いのちの果
限りなき幸を希ふにはあらねど

この身、このまま、

一日は一日を産み

明日もまたかくて

いのちの健在を心ゆくまで愛でたいと思ふ。

(昭和十四年「山桜」三月号)

白鳥

わが胸底に一羽の白鳥住めり
鮮麗なる装ほひと

只一つなる希ひに燃えて

あはれ やさしき白鳥住めり

日もすから 歌もなく

黄金なす波に浮びて

あえかにも望郷の憂ひに沈む

圓らなる その瞳

柔かき その額

未だ故郷の形を知らず

かぞいろに限りなく夢は馳せちる

あはれ やさしき白鳥よ

何時の日より わが胸に來り住めるや

はた何時の日 わが胸を離れて

うるはしの郷に馳せるや

おん身 かくて残り少なきわが日々を啄ばみ

只一つなる望郷に燃えて

わが心のうる深く

静かに水脈をひろげゆく

春浅き昨日も今日も・・・

あはれ わが胸底に

一羽のやさしき白鳥住めり

(昭和十四年「山桜」四月号)

微笑の詩

恒に明るく微笑んでゐる人がある

バスの中でも

行きずりの見知らぬ人にも

厨房でも 雪隠でも

恒に明るく微笑んでゐる人がある

静かに水脈のひろがるやうな

出会ひ頭の犬でさへ

くんと鼻を鳴らして寄るほどの
恒に暖かく身近に微笑んでゐる人がある

よつばど腹の出来た人でないと
こんな笑ひは笑へぬものだ
私もなんとか真似ようと思ふが
てんで話にもならない
鼠一匹見つけても
忽ち額に青筋を立てる始末だ

これではいかぬと思ひつゝ
早くも人生半ばを過ぎた
死ぬまでに一度でもいい
心からこんな笑ひ様がしてみたいと
憐れな自分を省みて寂しくなる

(昭和十四年「山桜」五月号)

一 碗の大根おろし

初夏の宵なり
病み疲れた寝臺に起出でて
ほろ苦き一碗の大根おろしを喰らふ
肌あらし病衣に瘦軀を包み
ぼつたりと重き繃帯フォーケに肉又を差込み
わたしはがつがつと大根おろしの一碗を喰らふ
思へば病みてより早や幾とせ
げにこれまで生きながらへて来たるものかな
一驚を喫す 一驚を喫す

見よ、己が姿を^{かけ}

而して思ひをなせ

日夜 病菌の裡に住へど

かくいのちの在るは嬉しからずや

貧しき一椀の大根おろしを愛ずるは幸ひならずや

われとて何時の日か

父の御許に帰り行くらん

なべてはそれまでの愛の十字架

ああ忘れ得ぬ人の世の一事ならずや

さらば 喰らはん 餓鬼の如くに喰らはん

大根おろし 大根おろし

涎と汁とそして涙と

ああ初夏の宵の一椀の大根おろし・・・

(昭和十四年「山桜」九月号)

おもかげ

いつの日も 虔しく

さやかに微笑むおもかげあり

われそのおもかげにならへて

心静かに笑まんとすれど

湧き来るは 悔と

はたしらじらしき憤怒のみ

こは何ならむ 二十年来一哀愁!

問ふもおかしや

明日こそは笑まねばならぬ

あたらしき夜明けと共に

幾そ度笑まんとして

在るは 恒に 空しき歎歎ぞ

ああ 捉へん術なき静謐の微笑よ

しかすがに いつの日か

あえかに笑まむ 明日あらば

いつの日も 限りなく

さやかに微笑むおもかげのあり

(昭和十四年「山桜」十月号)

木魚三題

一

その音は圓い その音は暖かい
さうしてその音は冴えてゐる
嗚呼木魚よ

お前は恒に腹を据え 頭っを叩かせて

二

あれあのやうに頭を叩かれて
あのやうに冴えた音が出ようとは
木魚よ お前は憎い お前は羨しい
私もお前の頭を叩かう お前の心に學ぶため

三

ポクポクと木魚を叩く
何事の在しますかは知らぬ

われかく恒に健やかに養はるるを思ひ
ポクポクと木魚を叩く

掌編

大きく呼吸をする　小さく呼吸をする
その咽頭のどを通ふものの暖かさ　幽かさ
ああ　あの空の色！　あの頬白ほおしろの歌！
ああ私の中の虔まごしい生命よ

(昭和十四年「山桜」十二月号)

療養日記

爪を剪る

日向に出て爪を剪る
ホータイの中からわずかに覗いた指
そを　ひとつひとつ
いとほしみつゝ爪を剪る
おほかたはくろずんで
あぶら気も艶もない
ぼろぼろの爪ではあるが
それでもわたしの血が通つてゐる
ちぢやははや
兄弟の血が通つてゐる
思へば療養幾とせ
かうして爪を剪るのさへ
夢のやうである
あの友よ
この友よ

不自由なおん身らの様を偲べば
ひとり爪を剪ることの
不思議さ ありがたさ・・・
ポキリポキリとこぼれ散る
ひぎのへの
ひとひらの爪取上げて
ひがげに翳し
ひるがへし
しみじみとおろがみ見る
ああ わたしには
爪がある、爪がある、と・・・

(昭和十五年「山桜」一月号)

閑雅な食欲

療養日記その三

食卓の上に朝日が流れてゐる
どこかで木魚の音がする
読経の聲も微かに聞える
わたくしは食卓の前に
平らな胡座をくんで
暫くはホータイの白い
八ツ手の葉のやうな自分の手をながめる
いつの間にこんなに曲つてしまつたらう
何か不思議な物でも見る心地である
わたくしはその指に

器用に肉又をつかませる

フオーク

扨て、と云つた恰好で
食卓の上に眼をそそぐ
今朝の汁の実は茗荷かな

それとも千六本かな

わたくしはまづ野菜のスープをすする

それから色の良いおしん香をつまむ

熱い湯気のほくほく立ちのぼる

麦のご飯を頬ばりこむ

粒数にして今のひと口は

どのくらゐあつたらうかと考える

わたくしは療養を全たうした

友のことを考へる

療養を全たうしようとしてゐる

自分の行末について考へる

生きることは何がなし

嬉しいことだと考へる

死ぬことは生きることだと考へる

食事が済んだら故郷の母へ

手紙を書かうと考へる

考へながらもわたくしの肉又は

まんべんなく食物の上を歩きまわる

「有り難う」とわたくしは心の中で呟く

誰にともなくおろがみたい気持ちで……

九月某日

(昭和十五年「山桜」二月号)

器

われ一つの器を持つ

朱き下繪と

黒き配色

ほのぼのと

白を浮べて

はかなしや

もろく貧しき器を蔵む

われ この器もて
卒然と
酒くみしことあり
をみなと臥して
肌のぬくみ
ぬすみしことあり
はた思ひなれば
すぎるものあり
おのれ投げうちて
こばたむと思ひしことあり
そのありし日の
名残をとゞめて
染に濁れる
底はくぢけ
縁は歪みて
あなおもしろき姿かな
さはれ いつの日か
年古りし色もち添へて
わびしらに
光をはなち
かけがひのなき
器なりせば
三十路の今ぞ
しみじみいとほしみつ

奥の細道

むなしとて険しきに怖ぢ
迷ひては深きに躡^たらふ
若くして旅は哀しや

(昭和十五年「山桜」三月号)

日 暮れて 道なほ遠し
泣くもまたせんなしなどゝ
ひとり道化て笑ひやまねど
忽ちに笏と返し
そくそくと胸に衝き来る
わびしらよ はかなさよ
いよよ行くほど
鹿の音あはれ
降りしきる落葉の音の深くして
「むなし」
「むなし」

と、訪め行きぬ

古木のきしむ日ぞかなし・・・
そのかみの日の
在りし日の
旅のなりはひ いつしかに
わが胸底にしろしたる
憂ひの層のあつけれど
世慣れ 旅慣れ
あはれを知るぞ悟りなれ
戒名おのれに唱ふれば
結ぶわらぢの紐かろく
われもひとりのをきなかな
しまらくは険しきをうなづき
しまらくは深きを愛でつ
今ひそやかにのぼりゆく

(昭和十五年「山桜」六月号)

義父房州の果實をたまふ

義父の心こもれる思ふ房州ゆ今日はるばると着きし枇杷の實

房州の強き日射しに熟れたるか大き李のまるまる赤し

義父のたびし大き李の赤々と灯に照れる見れば喰ふには惜しき

年々を送り来し枇杷この年もわが手にするよ黄なるつぶら實

ここにしてみることなき枇杷李今日の机に山と盛られし

(昭和十五年「山桜」九月号)

望郷台

このつたなき詩編を

北條民雄君の靈にささぐ

望郷台の宵なりき

遠き茜は照りはえて

蝸しぐれ 夏たけぬ

あはれ かなしく めづらかに

たまきをなせるめわらべの

われをかこみてあそぶらし

やまひふりたるいたつきの

われはなにをかこつべき

(昭和十五年「山桜」十月特輯号)

散華

詩心迷ふ

言にいひてさびしきかな
もだしゐてなぐさまぬかな
いづれ劣らぬまごころなれば
あはれわが筆に水ふくませて
鉢の萬年青を洗ふかな

自信

つゆふかき
あらくさなかに
まよひいりて
はつきりとさける
このあさがほよ

うつつ

湯のたぎり
心よろしも
こもりゐて
しるしばかりの
爪を剪りつゝ

又

ほとほとに
かたちくずれし
わが手はも
しるしばかりの

しこのこの爪

自責

老父死の床にあれば

ふたたびは
あれることなし
うつしよに
つかへるときよ
つひにあらぬかも

又

つれづれに
はこぶ筆なれ
みそ路のいまぞ
なほ書きなやむ
「孝行」の
文字のさびしさ……

(昭和十五年「山桜」十一月号)

静秋譜

凭りてをる老松の幹ひえびえと向つ杉原片日照りせり
繭^{はが}棒の尖端^{さき}に小鈴をつけむ小禽来て宿らば忽ち呼^へ鈴とならむか
わが眼はや十尺^{とさか}前方はおほつかな繭^{はが}棒の小鈴の鳴りをし思ほゆ
一枚の木の葉の如くぶらさがり繡眼兒は繭^はに驚かずをり

眼の縁に白きテープを巻きてをるこの小禽はも掌に愛し^お

(昭和十五年「山桜」十一月号)

短歌

蜻蛉譜

白菜のやは葉に溜る日のうらら蜻蛉の影のうつらひやまぬ
秋晴れのやは陽い照らふ栗穂立蜻蛉を止めて末枯れにけり
移り来て踏む庭土に蝉殻の一つ止まりし松毬を拾ふ
靄低く下枝を這へる桑の秀に頬白一つ鳴きしきる見ゆ

(昭和十五年「山桜」十二月号)

天路讃仰

ゆつくり遠くまで

原田嘉悦兄へー

ゆつくり
遠くまで行かうよ
息を切らさないやうに
行路病者にならないやうに
足下の覚束ない夜があれば
一望千里、輝く朝もあるであらう

焦らず、迫らず
恒に、等分の力を出して
扱て、ゆつくり
遠くまで行かうよ

愛は惜しみなく奪ふ

あますなく欲りし給へば
惜しみなく捧げざらめや
我が最も小さなる
喜びや
悲しみや
はた苦しみもまた・・・
君ゆゑにわれは生き
君ゆゑにわがいのち
永久とこしへに誓よき匂ひ放てり

郷愁

君が面輪つねにはつきりとわが裡に住まひ
君がみ聲絶えず凜々とわが裡にひびかひ
君がみ心限りなくわれをつゝめば
ああ故郷ふるさとは讃むべきかな
こよひ、晩鐘の彼方
夕映えの空を拜して
心しみじみ思ふかな
嗚呼君がみ心に生きばやとこそ・・・

死

そんなに私が可愛いと云ふなら

さあお前の腕に力をこめて
もつと、しつかり、私を抱擁しておくれ
お前は善良なる同居人、親愛なる友
さうして私の忠實なる僕よ
お前が、恒に、傍に居てくれるゆゑ
愚かな私も、どうやら怠け者にならずにすんでゐる
噫、やがて私の生涯が終る時
私はお前の媒介で
み父の前に、輝く花婿になるのです

（昭和十六年「山桜」一月号）

枯木のある風景

こいつはいつも枯木のやうにぶらさがつてゐる
墨灰色で、何かひやびやとしてゐる
季節の感應なんか勿論ありはしない
そのくせ どこか陰見で、本能的で、強靱だ
時にはじたにたと世辭を言ひながら隣に坐つてゐる
風が吹けばぶらぶらと揺れ
お天氣の良い日には虔しくとぼけてゐる
こいつめ、一つ、
ポーンと撲りつけてやりたい時がある
噫そんな時は、例の手くだで
美しい小禽の音楽かなんかを聞かせるのだ
うつかり眼が合ふと
眞黒な大鴉を宿めて
凝つとこちらを見つめてゐる
こいつはまるで枯木のやうにぶらさがつてゐる

（昭和十六年「山桜」二月号）

落葉林にて

私はけふたそがれの落葉林を歩いた。肅條と雨が降つてゐた。

何か落し物でも探すやうに、私の心は虚ろであつた。何がかうも空しいのであらうか。

私は野良犬のやうに濡れて歩いた。幹々は霏に濡れて佇ち、落葉林の奥は深く暗かつた。

とある窪地に、私は異様な物を見つけた。それは、頭と足とバラバラにされた、男の死體のやうであつた。私は思はず聲を立てるところであつた。

よく見ると、身體の半ばは落葉に埋もり、頭と足だけが僅かに覗いてゐる。病みこけた

皺くちやの顔と、粗れはてた二つの足と……。その時、瞑じられてゐた眼が開かれ、

白い眼がチラツと私を見た。

「アツ、父」 と私は思はず叫んだ

「親不幸者、到頭來たか……。」

と父は呻くやうに眩いた。許して下さい、許して下さい、と私は叫びながら、父の首に抱きついた。父の首は蠟のやうに冷たかつた。

それにしても、どうして父がこんな所に居るのであらうか、胃癌はどうなのであらうか、

その後の消息を私は知らないのだ。

「胃癌はどうですか、どうして斯んな所に居るのですか、さあ、私の所へ行きませう。」

私は確かに癩院の中を歩いてゐたのに、はて、一體此處は何處なのか、私は不思議でならなかつた。

「お前達の不幸が、わしをこんなに苦しめるのだ。」と父はまた咳くやうに云つた。私ははやぼうぼうと泣き乍ら父に取縋つて、その身體を起さうとした。しかし、父の身體は石のやうに重かつた。

「落葉が重いのだ、落葉が重いのだ。」と父がまた力なく叫んだ。

「少しの内、待つてゐて下さい。今直ぐに取除けてあげますから……。」

私はさう答へると、両手で落葉を掻きのけた。雨に濕つて、古い落葉は重かつた。

苔の馨りが私の鼻を掠めた。しかし、幾ら掻いても、後から後からと落葉が降り注いで、父の身體にはなかなかとどかない。私は次唐に疲れて來た。腕が痛くなり、息が切れた。私は悲しくなつて、母を呼んだ、兄を呼んだ……。

どの位経つたのであらうか。

私は激しい疲労のために、その揚に尻もちをついた。ぜいぜいと息が切れた。降り積る

落葉は見る見る父の顔も足も埋め盡して、

からから佗しい音を立てた。

「噫、父よ、父よ……。」日はとつぷりと暮れて、

雨はさびさびと降つてゐた。

「親不孝者、親不孝者……。」

何處からか苦しげに呻く父の聲が、私の耳元に、風のやうに流れてゐた……。

(昭和十六年「山桜」三月号)

遺稿

訪問者

我門前に立ちて敲く、我声を聞きて我に門を開く人
あらば、我其内に入りて彼と晚餐を共にし、彼も亦
我と共にすべし。 黙示録

第一篇 怯懦の子

こつ、こつ

こつ、こつ……

誰人ぞ今宵わが門を叩く者あり
日は暮れて、凜寒く吹き悩む

こつ、こつ

こつ、こつ……

われ深く黙して答へず
半ばを過ぎし書を読みつぎぬ

こつ、こつ

こつ、こつ……

訪へる声やまず続けり
凜はいよよ募る

われ炉に薪を投げ入れ
尚も黙せり、耳を覆ふ……

こつ、こつ

こつ、こつ……

旅人よ、何とてわが門を叩く

りょじん

われに何をか告げむとするや
われ知らず、わが扉開かざるべし

……旅人よ、わが門を過ぎよ

わが隣にも人の子は在り

こつ、こつ

こつ、こつ……

噫旅人よ、執拗なり

われは沈黙の人、孤独を愛す

われは聞くを好まず、聞かざるを欲す

われをして在るべき所に在らしめよ

……旅人よ、とくわが門を過ぎよ

しかして汝に受くるものに尋ねよ

こつ、こつ

こつ、こつ……

旅人、汝呪われてあれ

何ぞわれに怨みを持つか

如何なれば斯くもわれを求め

如何なれば斯くもわが安居やすらひを亂すや

汝に向ひ、外に開かむより

われは寧ろわが裡に死ぬるを望む

……旅人、汝わが門を行け

われは蝮の裔にして汝を噛まむ

こつ、こつ

こつ、こつ……

おお夙よ募れ、闇また来たれ

われ汝を呪はむ

汝、如何に叩くとも

わが扉は固く、朝に至るも閉さるべし

われは汝を知らず、われは汝に聞かず

さなり、われは己に生きるなり

……噫旅人、とくわが門を去れ

然らずば人の子汝を渡すべし

第二篇 訪問者

吾子よ、吾なり、扉を開けよ
汝を地に産みし者来たれるなり
吾、はるばると尋ね来るに
汝、如何なれば斯く門を閉じたる
吾子よとく開けよ
外は暗く、凧はいよよ募れり

噫父なりしか
父なりしか、宥せかし
おん身と知らば速やかに開きしものを
噫何とてわが心かくは盲ひ、かくは聾せり
わが父よ、しまし待たれよ
わが裡はあまりに乏しく
わが住居あまりに暗し
いとせめて、おん身を迎ふ灯とな点さむ

これ吾子よ、何とて騒ぐ
吾が来たれるは
汝をして悲しませむとにはあらで
喜ばさむ為なり
吾が来れば
乏しくは富み、そが糧は充たされるべし
吾久しく凧の門辺に佇ちて
汝を呼ぶことしきりなれば
吾が手足いたく冷えたり

噫わが父よ、畏れ多し
われおん身が、わが門を叩き
われを求むを知り得たり
されど、われ怯懦にして、おん身を疎み
斯くは固く門を閉じたり

噫おん身を悲しませし事如何ばかりぞや
われ如何にしてお宿しを乞はむ
さはれ、われは伏して、裡に愧づなり
わが父よ、いざ来たりませ

吾子よ、畏るゝ勿れ

非を知りて悔ゆるに何とて愧づる

夫れ、人の子の父、いかでその子を憎まむ

吾今より汝が裡に住まむ

汝もまた吾が裡に住むべし

父よ、忝けなし

われ、何をもておん身に謝せむ

わが偽善なる書も、怯懦の椅子も

凡て炉に投げ入れむ

わが父よ、いざ寛ぎて、暖を取りませ

われ囚人ていじゆめにして、怯懦の子、蝮の裔

おん身を凧の寒きに追ひて

噫如何ばかり苦しませしや

最愛の子よ、吾が膝に来よ

而して、汝が幼き時の眠りを睡れ

そは吾が睡り甘美あまければなり

われおん身を離し去らしめじ

わが貧しきを見そなはして

わが裡に住み給へば

われもまたおん身の裡に生きむ

噫永久とこしえに、われ、おん身の裡に生きむ

父よ、われをしてこの歡喜の裡に死なしめよ

父よ、われをしてこの希望の裡に生かしめよ

第三篇 癩者への接吻

わが園生のたそがれに
愛ぐしき者の訪ひぬ

幽かに匂ふ御衣の
さやかなるこそ貴けれ

遙るかにわれをみそなはし
近づき給ふ御気色の
いよよ気高くすゞるかに

われ御衣に触れみむと
心怪しく騒ぐかな

噫如何なれば斯くならむ
悲しきわが智消えうせよ

時は過ぎゆくわがなべに
なにとて御手を承ぐべしや

おん方われをみそなはし
訪ひ給ふこそ畏けれ

(心静かにわれをみよ
われのいづくに迷ひあり)

噫げに愚かなる僕かな
せめて御足を給ひかし

おん方笑ませ給ひつゝ
わが手を取りて貴しや
癩者の膿を吸ひ給ひぬ

(昭和十七年 「山桜」十一月号)

東條耿一

- 一九一二年(明治四五年)四月七日、栃木県生まれ
- 一九三三年(昭和八年)四月二一日、全生園入院
- 一九四二年(昭和十七年)九月四日死去、(三〇歳)

作品総目次

環眞沙緒子名の作品

昭和九年

- 寂寥 (詩) (山桜一月号)
- 恋の短章 (小曲) 同
- 渚 (小曲) (山桜二月号)
- 洪水 (詩) (山桜六月号)
- 顔百態 (特選欄) (山桜七月号)
- 春夜詩抄 (小曲) (山桜七月号)
- 馬 (童謡) (蠅人形九月号)
- お面・神楽 (詩) (山桜七月号)
- 風船玉 (童謡欄3等) (詩人時代七月号)
- 母愁の秋 (詩) (山桜文芸特輯號)
- 蕎麦の花 (小曲) 同
- キャンプ (童謡) 同
- 誰かしら (詩人時代九月号)

東條環名の作品

- 袖の實 (特選欄・小曲) (山桜十月号) (野の家族)
- 歸航(母への手紙) (詩) (野の家族)
- 戀の紅糸 (民謡) 同
- 秋の朝 (童謡) 同

- 一本橋渡る (特選欄・童謡) (山桜十一月号)
- 蜜柑に想ふ (小曲) 同
- 晩秋を知る (民謡) 同
- 濱邊にて (特選欄・小曲) (山桜十二月号)
- 冬・断章 郷愁 (詩) 同
- 滑り台 (童謡) (山桜十二月号)

- (詩人時代四月号)
- (野の家族)

昭和十年

- 病床・断片 (山桜一月号)
- 買はれ人形 婚禮の夜に或る娘の歌へるー (詩人時代一月号)
- 雪達磨 (童謡) (山桜二月号)
- 林檎 (小曲) 同
- やくざ節峠の唄 同
- 階段 (芝間甫先生に捧ぐ) (合同詩集・野の家族)
- 雨の音に想ふ 同
- 秋三唱 (小曲) 同
- マドロス哀歌 (小唄) 同
- 夕暮れ・小暮れ (童謡) 同
- 便り (小唄) (詩人時代四月号)
- 病床哀戀賦 (山桜五月号)
- 大境の子守唄 同
- 想い出 同
- 野道 (山桜六月号)
- 愛人の歌 同
- 春の悲歌 (小曲) 同
- 郷愁譜 同
- 日光ばやし (小唄) (詩人時代六月号)
- 春雨戀慕抄 (山桜七月号)
- 忍従の謝肉祭 (カアニバル) 同
- 合圖 (民謡) 同
- 乳房 (山桜八月号)
- 白鳩に寄す (小曲) 同
- Chocolateのゆふぐれ (山桜九月号)

ねがひ（小曲）

同

金婚式

（詩人時代九月号）

酸漿の詩

（山桜十月号）

ひめぐと（小曲）

同

子供

（山桜十一月号）

彼女とゆふぐれ

（蠟人形十一月号）

祈り（小曲）

（山桜十一月号）

槍

（山桜十二月号）

花言葉（小曲）

同

海亀

（蠟人形十二月号）

ゆふぐれの中の私

同

昭和十一年

たそがれの魔術師

（山桜一月号）

病猿の詩

（山桜二月号）

葬列のあるくれがた

（蠟人形二月号）

羽子をつく

同

葬列

（山桜三月号）

そんな夜

（蠟人形三月号）

散歩

（山桜六月号）

東條耿一名の作品

桐の花

（山桜九月号）

傷

（山桜十月号）

ゆふぐれ

同

昭和十二年

青鳩

（四季一月号）

雨後

（山桜一月号）

初春のへど 俗物の歩み牛の如し

（山桜二月号）

少年

（山桜二月号）

靄

(四季二月号)

(山桜三月号)

望郷臺

(文学界二月号)

椰子の実

(山桜三月号)

誕生

(山桜五月号)

舞踏聖歌

同

霧の夜の風景に詠める歌

(山桜六月号)

鞭の下の歌

同

伴侶

同

心象スケッチ

(山桜七月号)

別れて後に

(山桜八月号)

夕雲物語

(山桜十月号)

晩秋

同

樹々ら悩みぬ

北條民雄に贈るI

(四季十一月号)
(山桜十二月号)

国旗

昭和十三年

元旦スケッチ集

(山桜一月号)

木枯の日の記憶

同

念願

(山桜九月号)

夕雲物語 其二

(山桜十月号)

盃蘭盆

同

昭和十四年

朝霧

(山桜一月号)

友を祝し給はずば

(山桜二月号)

明日への言葉

(山桜三月号)

白鳥

(山桜四月号)

微笑の詩

(山桜五月号)

一椀の大根おろし

(山桜九月号)

おもかげ

(山桜十月号)

女と趣味 (手記)

同

木魚三題

(山桜十二月号)

昭和十五年(詩 手記 創作)

療養日記 爪を剪る

(山桜一月号)

閑雅な食欲 療養日記その三

(山桜二月号)

器

(山桜三月号)

駒鳥 (手記)

(山桜三月号)

奥の細道

(山桜六月号)

新庭雑感 (手記)

(山桜八月号)

義父房州の果實をたまふ (短歌)

(山桜九月号)

霜の花 (創作)(小杉不二)

(山桜十月特輯號)

望郷台 (小杉不二)

同

散華

(山桜十一月号)

静秋譜 (短歌)

同

蜻蛉譜 (短歌)

(山桜十二月号)

昭和十六年(詩、手記)

天路讃仰

(山桜一月号)

癩者の父(手記)

(聲 一月号)

ルルドの引越(手記)

(聲 二月号)

枯木のある風景

(山桜二月号)

落葉林にて

(山桜三月号)

子羊日記(手記)

(聲 三月号)

種まく人達(手記)

(聲 四月号)

金券物語(手記)

(聲 五月号)

鶯の歌(手記)

(聲 六月号)

柿の木(手記)

(聲 八月号)

癩者への布教(手記)

(聲 八月号)

昭和十七年

草平庵雑筆 (手記)

(山桜三月号)

なぐられの記 (手記)

(山桜七月号)

遺稿 訪問者

(山桜十一月号)